

感謝箱献金だより

ガラヤのほと 22 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



「宣教のみ業に参加する婦人会」

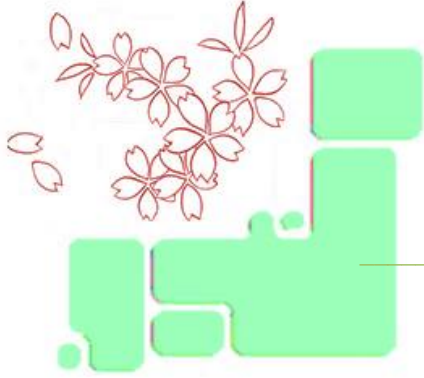
神戸教区 主教 アンデレ 中村 豊

「初期に来日したイギリス人宣教師たちはマザーズ・ユニオン日本支部を発足させ、アメリカ出身の宣教師たちは婦人補助会日本支部を設立しました。しかし、日清戦争後の 1895 年、台湾が日本領となってからは同地での福音活動が活発となり、この 2 つの婦人の会は合併し、現在の「婦人補助会」が結成されました（1908 年）。婦人補助会は、婦人伝道師を送るための基金募集を行なって、これらの活動を支援しました。」
（SPG 宣教師レオノア・リー書簡より）

戦後から 1960 年代、神戸教区では多くの婦人伝道師が牧師のもとで働いておられ、神戸地域では約 10 名を数えました。婦人伝道師は礼拝の準備・後片付けから信徒のケアまで、牧師の牧会活動を陰から支える存在でしたが、洗礼準備も大切な役目でした。日曜日の礼拝には必ず出席すること、週に一度の聖書研究会への参加を欠かしてはいけないなどを、1 年以上、厳しく訓練されてようやく洗礼を受けることができました。1970 年代に入り、経済成長時代到来と共に、多くの人たちが教会を離れるなか、婦人伝道師に鍛えられた信徒は、教会の中核となって、活躍したのでした。当時、ほとんどの教会は貧しく、婦人補助会の財政的支援抜きにしては、婦人伝道師の働きは考えられなかったのです。その婦人補助会も 1974 年に婦人会と名称を改め、今日に至っております。

キリスト教人口 1%以下の今の日本にあって、その信仰を正しいかたちで守ることは困難を極めます。キリスト者として日々の生活を送る中でお互いに励まし合い、信仰上の喜びや悲しみ、悩みを共有する場が必要なのです。その一つが婦人会の交わりだと思います。同時に、かつて婦人伝道師を援助していたように、教会内部や今の世界の弱い部分を補うような奉仕の業が婦人会に求められております。私たちはキリストの体の一部であり、その働きはキリストの業、つまり神の栄光が現される器として存在し、私たちの賜物を用いることは、すなわち宣教の業なのです。それを恵みとして受け取るための組織が婦人会です。

「（日本聖公会婦人会は）まことの平和をつくりだすために、日本聖公会に連なる婦人信徒が共に神の宣教のみ業に参加することを目的とする（2007 年定期総会）。」と述べている通りです。



東日本大震災記念礼拝出席と巡礼の旅

日本聖公会婦人会 会長 前田 伸子

主の平和がありますように

2011 年 3 月 11 日の震災から 5 年が経ち、北海道から沖縄までの 10 教区婦人会の皆さまに、様々な思いを抱いて《2016 年 3 月 11 日東日本大震災記念礼拝出席と巡礼の旅》に参加していただきました。

来る 6 月に開催されます日本聖公会婦人会総会時には、其々の教区に持ち帰られた思いを、報告書に纏めてお手元にお届けいたします。

日本聖公会婦人会では、東北の皆さまのご様子はいかがででしょうかと案じて、祈りつつ過ぎてまいりました。東北から遠く離れた教区婦人会では、費用の問題などを含む距離的な問題のために、訪問される機会に恵まれず、徐々に情報が少なくなっているという声を聴きました。

そこで、「東日本大震災被災者支援積立金」の意義深い活用方法として、特に被災地を訪問しにくい遠い教区を含む 10 教区へ呼びかけ、可能な限りお一人でも多くの方に身体と心を現地に運んでいただき、直接触れていただき、お心を届けていただくことを考えました。

それぞれが、見て、聴いて、感じたことを持ち帰り、それぞれの地と東北が繋がり、お互いが寄り添える関係が深まることを願いました。

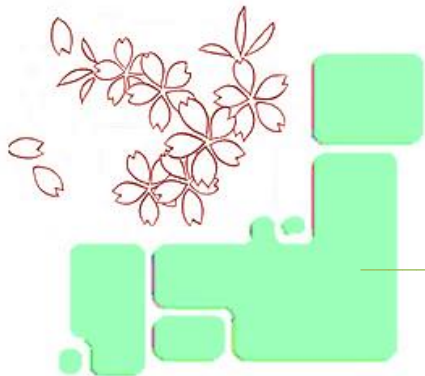
私たちは、ローマの信徒への手紙 12 章 15 節「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」のみ言葉を心にとめながら、新地から南相馬と郡山をお訪ねしました。一人一人違う視点で被災地を見ていただいて、仮設住宅では、被災された方々との交わりのひと時を過ごしました。

11 日の夜は、磯山聖ヨハネ教会の荒みよこ姉と「東日本大震災管区プロジェクト・センター新地」専従スタッフの松本普さんにお話を伺い、夕食のひとは歓談の時を過ごしました。そして、ミニバザーとして、がん小屋仮設住宅で作られたイチゴのストラップやたわし、天使のオーナメントを販売し、皆さんに全て買っていただきました。また、お訪ねした南相馬市鹿島区寺内塚合応急仮設住宅では、集まった女性の方々がフクロウのストラップや置物などを作っておられる集会所で、お話を伺いながら作品を買わせていただき、とても良い時間を過ごすことができました。注文予約されている教区もありました。

作っておられる方は、作っても置いておくだけではさみしいが、たくさんは作れない。でも今回は、出会ってお話をして、作れる数だけお願いするというお互いに心の通う注文ができ、喜びを分かち合うことができました。

まだまだ仮設住まいが続く厳しい現実ですが、一人では無く、集まって少しでも楽しい時を過ごしていただけるように、お手伝いができることを願っています。

巡礼の旅の最後には、参加していただいた婦人会の皆さまから東北に来る機会が与えられたことへの感謝のお言葉をいただき、各教区と東北の関係が深まる希望と光が見えました。今回結ばれた繋がりが続きますように、神さまのみ守りとお導きをお祈りいたします。



大震災から 5 年

仙台基督教会 西 正子

東日本大震災から 5 年の歳月が過ぎた 2016 年 3 月 11 日(金)、東北教区主教座聖堂仙台基督教会において東日本大震災 5 周年記念聖餐式が執り行われました。聖餐式には大韓聖公会の金 根祥(キムグンサン)首座主教、日本聖公会の植松誠首座主教をはじめ各教区の主教、司祭、信徒が多数参列しました。震災の時刻午後 2 時 46 分には鎮魂の鐘の音を聞いて多くの震災犠牲者を悼み黙想し、被災者の苦境を覚えて共に支え合う祈りを捧げました。

震災後、私たち仙台基督教会婦人会では、自分たちにできる被災地支援を考えていた時、「いっしょに歩こうプロジェクト」のスタッフの方から支援プログラムのひとつに福島県新地町の仮設住宅でのお茶会が加えられたことを知り、私たちもお手伝いすることになりました。メンバーは婦人会、教会の有志、仙台聖フランシス教会有志、中部・大阪・横浜各教区、その他多数の方々が来て下さり、東京の教団の方も毎月定期的に足を運んでくださいました。

お茶会の内容は、今でも定番になっている抹茶・コーヒー・紅茶・緑茶そしてフレッシュな仙台のケーキを用意し、ワゴン車で月一度、新地の皆さんとの出逢いを楽しみに現在も足を運んでおります。

お茶をいただきながら皆さんのお話を聞き、叙情歌や唱歌を口ずさみ、歌に合わせて体操(シャボン玉、鬼のパンツ、桃太郎さん等)をして、なごやかに楽しい交流を続けています。

新地町の高台にあった日本聖公会東北教区の磯山聖ヨハネ教会は、震災時近隣住民 17 名が避難し、翌日自衛隊に救助されました。教会はその後老朽化が激しいことから 2013 年 2 月 16 日礼拝堂聖別解除の祈りが捧げられた後、同年 3 月 12 日に解体されました。この磯山聖ヨハネ教会は私たちにとって、日曜学校のキャンプや修養会などが行われた思い出深い大切な所でした。

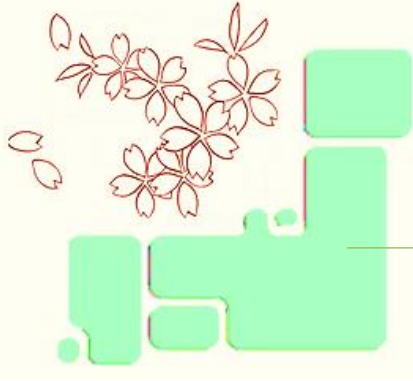
今後、礼拝堂再建のため多くの方から献金が寄せられ、また教会用地の寄贈も受けて新礼拝堂が与えられる日もそう遠くではないと伺っております。私の希望としまして、新礼拝堂が建立された折には、日本聖公会婦人会の皆様から記念樹を植えていただき、復旧の証となればよいと願っております。

私たちの婦人会では、小さな行いですが 2011 年 6 月より被災者支援チャリティミニバザーを始めました。教会の人に声掛けして、日曜雑貨など献品をいただき主日礼拝後に販売しています。これまでその売り上げを福島の南相馬、新地、いっしょに歩こうプロジェクト、東北教区東日本大震災被災者支援室へ募金としてお捧げしました。今後も継続してまいります。

『わたしたちは、主イエスキリストと共に
歩いてくださることに励まされいっしょに歩きます』

管区ミッションステートメントスローガンより





泣く者とともに泣きなさい

感謝箱献金事務局 スタッフ 金子 みどり

3月11日～12日に行われた日聖婦「東北巡礼」の旅に加えていただきました。

まずはじめに、午後1時からの東北教区主催「東日本大震災5周年記念聖餐式」および「午後2時46分の黙想」に参加させていただきました。建て替えられて明るくきれいな主教座聖堂に教区内外から多くの方々が集い、東北教区加藤博道主教様の司式で聖餐式が始まりました。「東日本大震災を覚えて」という特祷を献げ、『人の悲しみを わがものに 愛の人となり 生きてゆこう』と歌い、ルカによる福音書「中風を患っている人を・・・床ごとつり降ろした」の箇所を拝聴しました。それに続く説教は大韓聖公会首座主教の金 根祥師父でした。かなり長く日本語で話され、私たちを驚かせました。金主教様の韓国語での説教はとても優しさに溢れていました。私たち日本人の悲しみをご自分の悲しみとして涙を流さんばかりのご様子に心打たれました。説教は嬉しいことを語らなければならないが、今日はそれはできませんと。韓国でのセウォル号沈没事故でも多くの若者の犠牲者が出て大変悲しい思いだが、日本の震災も大変悲しい、と遺族の方々と共に泣いてくださったと思いました。私たちに何が出来るのでしょうか。金主教様は、その日の福音書から、この人たちは、友のためにできる最善を尽くした、とおっしゃいました。そして、神様はそれに応えて下さいました、と励ましのお言葉を下さいました。

陪餐後、2時46分を待ち、鐘を鳴らして祈りの時間を持ちました。被災された3人の方の証言を聞き、お話ごとに頌栄「恐れるな 煩うな 主はともにおられる 満たされる あなたは 神によって」を歌いました。

式の中で、来賓の紹介とともに、届けられたメッセージが紹介されました。ひとつはカンタベリー大主教様からで、同時間にカンタベリー主教座聖堂でも震災を覚えて祈ります、というもの、もう一つは東北教区と姉妹関係にある大韓聖公会のレジヨン教区の主教様からで同様のメッセージが届きました。主にある兄弟姉妹が泣く者とともに泣いてくださっていることを実感しました。

植松首座主教様の祝福をいただき、越山哲也司祭様の派遣に送り出され、一日目を終えました。



仙台基督教会での追悼記念礼拝、被災された方の証言をうかがった



写真右左ともに 磯山聖ヨハネ教会跡地にて



奥まった所に「祈りの碑」が見える

翌日は被災地巡礼をいたしました。

3人の犠牲者を出した磯山聖ヨハネ教会のあった地でお祈りをささげました。この場所にはこれらの方のお名前が刻まれた「祈りの碑」がたてられています。

すこし離れたところにある埴浜の東林寺が新たに造成した墓地には、「ときわ旅館」の三宅さんご夫妻とお嬢さんの中曾順子さんのお墓とともに移転された慰霊碑（右写真）があり、3人の方の魂の平安をお祈りしました。



仮礼拝堂にも立ち寄り、心のよりどころとしての教会が、いかに必要とされているかを感じました。そして、その信徒さんたちが地域で重要な役割を果たしていच्छやること、また仮礼拝堂の建物も、新たに建てる土地も信徒の方の提供されたものであることをお聞きしました。

夕方到着した郡山聖ペテロ聖パウロ教会で夕の礼拝を献げました。この礼拝堂の修復、殊にステンドグラスの修復にも信徒の方々の尊い献げものがあつたことを知りました。

そして、池住さんから「こどものリフレッシュプログラム」に感謝箱献金が活用されていること、今後も支援をお願いしたい旨のお話がありました。建て直された「セントポール会館」は地域にも開かれたものとなっており、「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の事務所もおかれています。 主に感謝！

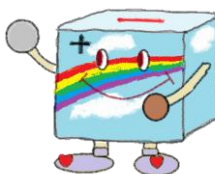


郡山聖ペテロ聖パウロ教会にて池住さんのお話を聞く



セントポール会館

(ホームページより転載)





東日本大震災5周年を迎えて

日本聖公会婦人会 感謝箱献金事務局 チャプレン

司祭 ヤコブ 三原 一男

2011 年3月 11 日（金）、午後2時 46 分・・・あの震災が起こりました。あれから5年、私たち一人一人にとって「あの時」の記憶がよみがえってきます。私はあの時、当時神学校入学前の北澤洋聖職候補生と二人で、ベッドから動けないご婦人の自宅を1時半に訪問し、私宅聖餐の後、楽しく懇談をしていて、そろそろ失礼しようかなと思っていた矢先でした。突然の大きな揺れ、それが長く続き、テレビが支えなければ倒れてしまうところでした。その日から、日本中が地震、津波、原発事故によって、大きく強く長く揺さぶられ、5年経った今も揺れているのです。

振り返ってみますと、当教会でもとにかく直後は、緊急募金と救援物資が集められ届けられました。被害の深刻さは、地震、津波による死者や家を失ったおびただしい数の人々に止まらず、放射能汚染の恐ろしさが「復興」を妨げる大きな壁となったのです。そんな中、横浜教区は東北教区を後ろから支える働きとして、当時復興支援の働きに携わっていた長谷川司祭の司牧する秋田聖救主教会の主日礼拝を月1回順番で守ることになったのです。5月その働きで、宮城、岩手の被災地を巡りました。南三陸を車で走っていた時、津波ですべてが破壊された道でナビが空しく線路を通ることを告げていたのです。物資の支援はもう充分足りていると思われていたその年の秋になって、未だに食料にも事欠くという南相馬からの情報に触れ、南相馬六角支援隊との関わりが始まりました。当教会では、2012 年2月から「アンデレプロジェクト」が始まり、福島聖ステパノ教会との交流が始まり、毎月信徒が2名ずつ福島聖ステパノ教会の主日礼拝に出席したり、バザーや講演会、キャンプに招いたり、音楽グループがコンサートに出かけて交流の時を持ちました。5年の歳月が流れました。

今年になって、1月に福島聖ステパノ教会、仙台から新地、南相馬を訪れ、この3月 11 日～12 日、日本聖公会婦人会の各教区、沖縄から北海道まで約 35 名の皆さんと共に5周年記念礼拝に参加し、バスで新地と南相馬を巡ることができました。特に感じましたことは、目に見えた傷跡がようやく少なくなり、復興に向けての歩みが見られる中、逆に取り残されてしまっている人々の悲慘さが浮き彫りになっているということです。改めて5年を過ぎた今、これから私たちには、一体何ができるのでしょうか。

物の支援から心の支援、支援というより交流を続けること、寄り添うこと、忘れないこと、それでもなお、無力感に襲われますが、それでも私たちは「想像すること」ができます。その日々の生活の中で、A さんの不安、B さんの孤独、C さんの笑顔、D さんはどうしているだろう。それらを祈りとして神にささげ、ゆだねる時、平安と希望が与えられるのです。



仮設住宅にて手芸品を作成する皆さんとの交流

お 献 げ 先 の 近 況 報 告

難 キ 連

(難民・移住労働者問題キリスト教連絡会)

難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(難キ連)は教派を超えて難民や外国人労働者問題に取り組む、日本でただ一つのエキュメニカルキリスト教任意団体です。キリスト教精神に基づき、在日の難民や、外国人労働者の方やそのご家族の支援を目指しています。2015年度は、多国籍家庭の出産支援、生活支援、強制送還により残された家族の渡航支援、児童相談所保護の子供と親の関係調整など実際の支援のための費用の一部にも感謝箱献金がお役にたっています。

一月には難民のご夫婦に赤ちゃんが生まれ、横浜教区の2教会有志よりおむつや衣類などを送らせて頂きました。また信徒さんで保育士をしている方が、保育所のお母さん達に呼びかけ、赤ちゃん用のお下がり衣類等を送ってくれました。

横浜教区社会委員会では今年も面会支援が計画されています。目の前で助けを求めている難民のために力を尽くして、活動を続けている「難キ連」に対して、感謝箱献金として支援できたことは、意義のあったことと感謝しています。

(近藤順子)



「リグリマ・ジャパン」

リグリマ・ジャパンが少数民族ガロのリグリマ・バングラデシュの支援を始めて12年が経ちました。改良かまどプロジェクトも新らしく結成されたアンチェングリグループ含め、ほぼ全家庭に支給され、今後はメンテナンスのみとなりました。

おしゃべりしながらも真剣な裁縫トレーニングの技術も上達し、販売し利益を得る事も可能となり、生活向上への手助けと共に、女性たちの心の支えとなっています。

今年は上記に加えガロ民族にとって大切なたんぱく質源である、魚の養殖池の掘削、洪水多発地域の掘削済みの池では魚の販売まで出来る様になり、感謝ですが、ほんの一部であって、まだまだ先は長い状況です。

そして、医学的無知が原因で命の危機にさらされる女性を救うため、医師から医学的知識を学び、健康への認識を高めるセミナーを開催、がんを患う近隣の女性のため自主的に寄付を募ったり、自ら考え行動し、伝達する方向に向かいつつあります。

国からも少数民族と疎外され卑下される中、経済的にも生活向上の為に必死に頑張っている人々の事を心に留め置き、日々の祈りの中に覚えていただければ幸いです。(土屋晴子)

「ニームの会」

南インドの各村の外れの居住区に住むダリット(元アウトカースト・不可触民)の女性たちの差別をなくし、自立を促すための活動をしているWOLDと連携し、現地訪問(スタディー・ツアーの開催)や経済的な支援を行っています。

支援対象の女性たちは、感謝箱からの献金により、2015年度はWOLD農村センターにある土地を利用した有機農法、およびキノコ栽培のためのトレーニングを受け、農機具も購入し土地を耕しましたが、現状ではキノコの栽培は難しく、今後は在来の伝統品種をはじめ、かぼちゃ、瓜類、豆類、大根などの有機栽培に力を入れています。自然農法では豚やネズミ、虫の害を避けるための知識や対処のための訓練も必要になってきますが、自然堆肥を使った有機野菜への関心が地域の消費者の間でも高まってきており、また、収穫物がスーパーマーケットで販売され、ブランド品として認められつつあることが、女性たちの自信と意識向上につながっているとのことです。

2015年秋に南インドは集中豪雨に襲われ。コナツの葉で葺いた建物は壊れ、多くの人が家を失い飢餓に瀕しました。ダリットの女性たちの畑も水浸しとなり、雨期に入って苗を植え成長し始めた時だったので大きな被害を受けましたが、幸い井戸の水は満杯になったので、1月から新たに苗植えをはじめることができたそうです。

(古谷美子)

感謝箱とわたし

聖職候補生 テモテ 姜 炯俊

横浜聖アンデレ教会には信徒の多くの方も存在を知らない空間があります。会館の厨房を通して小さな廊下を過ぎ、執事の部屋として使われた所のドアを開けるとそこには小さな部屋があります。置かれているのは小さなテーブルと書類、そして作業用のパソコン数台だけ、しかしそのアンデレで最も小さき部屋で最も貴重な働きが成されています。そこは感謝箱献金事務局です。

神学生の時代を含め、4年近く横浜聖アンデレ教会に関わっている私は、感謝箱献金事務局が当教会に設置されてから自然に感謝箱献金事務局の働きを近いところから見ることができました。

神学校を卒業し、現場勤務になってから感謝箱献金の働きと出会う機会も増えました。時々陪席して話を聞いたり、報告会にも参加したりしながら私が感じることは、この働きの中にはまさに「僕の精神」が宿っているということです。

「日々神様から与えられている恵みに感謝の気持ちを込めて」感謝箱献金のその精神は私たちキリスト者が持たなければならない僕の精神とも言えると思います。聖餐式の奉獻の時、「すべてのものは主の賜物。私たちは主から受けて主に献げたのです」という言葉のように、私が持っているすべてのものが主から与えられたものであると認め、感謝の気持ちを込めてその元の主の働きのために献げること、単純な献金じゃなく、その僕の精神一つひとつが集まり、主の働きのために使われる感謝箱献金は、私にキリスト者としての生き方をもう一度思い出させてくれる大切な機会になっています。



プロフィール

名前：姜 炯俊（カン ヒョンジュン）
生年月日：1984年7月25日生まれ。
趣味：ドラマ観賞
2015年聖公会神学院卒業、横浜教区
横浜聖アンデレ教会勤務

♪ 難キ連 チャリティコンサートのご案内

日時：2016年7月23日（土）午後2時

会場：お茶の水クリスチャンセンター 8階チャペル

出演：ボーマン・ベアンテ氏（チェロ）、ボーマン・ルリ子氏（ピアノ）

【お問い合わせ先】

〒110-0005 東京都台東区上野 1-12-6 宝石ビル 3F

「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」

TEL：03-5826-4915 Fax：03-5826-4916 事務局携帯：090-6012-8252



編集後記❖ 今号も皆様にご寄稿をいただき無事に発行することができ感謝いたします。

桜の花の咲く頃となりました。被災された方々から私自身がたくさんの思いやりをいただき、大切にさせていただきましたことを深く心に留めながら、この5年という歳月を振り返っています。多くの方が私の手をとって歩いてくださいました。ご自身の状況を受け止め、長く困難な時と向き合ってきた経験を、親身に相手を思いやる力として増し蓄えてこられたお一人おひとりのかたが、とても誇らしく導かれる思いです。これかもどうぞ宜しくお願いいたします。 K・M